

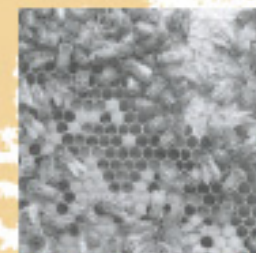
林中絵薪 The tale about firewood

この建築における間伐材は、建築材料であり、型枠であり、薪である。時間の中でその役割を変えていく。そうして作り、作られたこの場所と時間を通して感じ考えることで、これまでにないより密接な関係を木との間に築けるのではないだろうか。



※STORY③～⑤に該当する

SECTION S:1/30



薪としての建築



生木の力強さと木目の美しさ



原始的な持ち出し構造

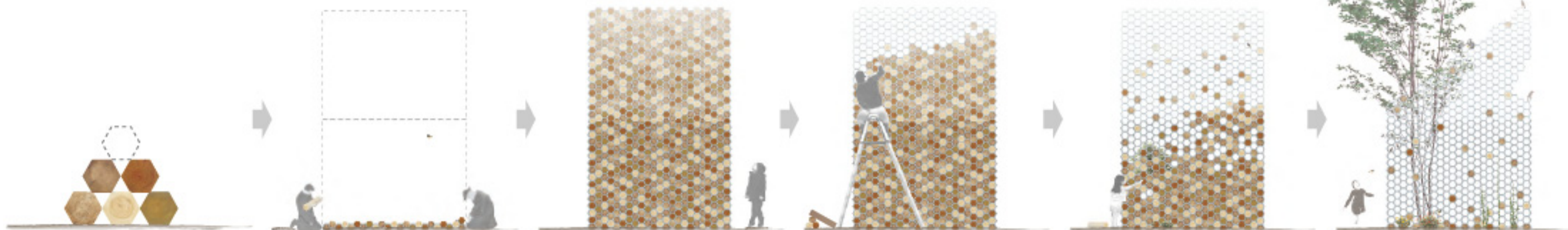
SITEは薪と森との境目、森の入口を想定している。毎年一棟ずつ建てられ年を経るにつれ、薪に向けて木が伸びていく。数年目からは逆に森側から朽ち果てていく。

The image of four years after

STORY 2012
薪小屋（間伐材→薪）の時間を楽しむ

2014

20XX



①間伐材丸太を六角形に製材する。六角形にすることで製材段階でのロスを少なくすることに繋がる。

②間伐材と低透水性粘土を交互に重ねる
粘土の厚みは30mm程度を想定している

③低透水性粘土、間伐材を乾燥させる
家型の内側で焚火をすることで乾燥を早めることになる

④薪として使えるまで十分な乾燥期間をとり、上から順に引き抜いていく

⑤薪の抜かれた孔には鳥、小動物、虫や植物が入る

⑥やがて長い時間をかけて風化が進み全て土に戻る

ELEVATION:1/50